

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 064

(2023/24年度 USDA米国農務省 11月9日発表)

[ハイライト]

① 世界の穀物需給は順調な生産に支えられ安定、市場価格も底を打った気配だが、国別には作況変動が大きい

下記のコメントと需給表の通り、各品目総じて順調な生産動向であり、市場価格も小麦が5ドル後半/コーンは4ドル後半/大豆は13ドル前半と「コメ」を除きこの数年来の底を打った気配だが、小麦については国別作況変動に注意が必要である。好調なロシアは、今年度生産90百万ト/輸出50百万トと史上最高見込み。一方豪州は、エルニーニョの影響で生産/輸出が昨年40/33⇒今年25/18百万トと35-45%大幅減。CANも数百万トの減少避けられず、ロシアの存在感が益々高まる様相。

② 世界の期末在庫は一見潤沢に見えるが、圧倒的数量の中国在庫を除けば"砂上の楼閣"となる可能性がある

世界穀物の今年度期末在庫見通しは27.4%(7.7/28億ト)と、低水準だった16/07年度17.1%やFAO適正在庫基準25%を上回り一見潤沢に見えるが、大量の中国在庫を除けば危うい状況にある。中国除いた世界在庫率は12.3%、品目別には小麦14.8%,コーン,10.2%,コメ14.8%と大幅にその在庫率は急落し需給状況は一変する。逆に市場から隔離されている中国全体在庫率は69.2%、小麦86.4%,コーン66.4%,コメ67.8%と驚異的数字である。その保管コスト/在庫場所/品質管理等の実態は…?

③ その後のウクライナの穀物生産/輸出動向は厳しさは続くが当初より回復傾向、菜種/大豆は前年より大幅増

UKRの今年度穀物生産/輸出見通しは別表の通りほぼ固まってきた。具体的には小麦23/12、コーン30/20百万トと生産は侵攻前比で約35%減少だが、前年比は5%増と健闘している。輸出は黒海回廊閉鎖以来ルーマニア等の迂回路利用するも合計32百万トと侵攻前比約30%減、前年レベル44百万ト達成は厳しい状況である。一方油糧種子は生産拡大し、ひまわり前年比15%増14百万ト、菜種は史上最高の430万ト、大豆も同様に480万トと戦禍のなかで増産に転じている。

1. 世界穀物需要の概要

① 生産量:	2,799百万ト (前年比1.8%)	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑)
② 消費量:	2,805百万ト (前年比1.3%)	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑)
③ 貿易量:	496百万ト (前年比0.2%)	増 ↑、前月比0.4%	増 ↑)

2. 小麦

① 生産量:	782百万ト (前年比1.0%)	減 ↓、前月比0.2%	減 ↓)
② 消費量:	793百万ト (前年比0.1%)	増 ↑、前月比0.0%	増 ↑)
③ 輸出量:	205百万ト (前年比7.0%)	減 ↓、前月比0.6%	減 ↓)
⑤ 在庫量:	259百万ト (前年比4.0%)	減 ↓、前月比0.2%	増 ↑) / (在庫率 33%) うち中国134百万ト、占有率52%
④ 価格:	<u>\$5.73/Bu</u> (前年\$8.48/Bu / 前月\$5.68/Bu) と前月比\$0.05 上昇。		
⑤ 概況:	世界生産量は、前月比 <u>ロシア 5百万ト増</u> /インドは逆に3百万ト減で全体は微減。前年比では8百万ト減少となった。消費量は前月前年比とも変動なく好調を維持。消費量が生産量を上回る為、 <u>期末在庫は前年比約9百万ト/4%減</u> となる見込み。		

3. とうもろこし

① 生産量:	1,221百万ト (前年比5.5%)	増 ↑、前月比0.5%	増 ↑)
② 消費量:	1,205百万ト (前年比3.2%)	増 ↑、前月比0.4%	増 ↑)
③ 輸出量:	200百万ト (前年比10.3%)	増 ↑、前月比1.7%	増 ↑)
④ 在庫量:	315百万ト (前年比5.3%)	増 ↑、前月比0.8%	増 ↑) / (在庫率 26%) うち中国202百万ト、占有率64%
⑤ 価格:	<u>\$4.77/Bu</u> (前年\$6.81/Bu / 前月\$4.92/Bu) と前月比\$0.15 下落。		
⑥ 概況:	世界生産量は、前月比 <u>米国が4百万ト増</u> /全体では約6百万ト増となり前年比では66百万ト増と順調な見通し。消費量は前年比3.2%増加の見込み。輸出量は昨年早魃の為落ち込んだ米国の生産/輸出が復活した為 <u>2億ト台を回復</u> 。期末在庫は生産量が消費量を大きく上回り前年比大幅増加し <u>3億トを超える</u> 見込み。結果、価格は5ドルを切り4ドル後半まで下落。		

4. 大豆

① 生産量:	400百万ト (前年比7.6%)	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑)
② 消費量:	384百万ト (前年比5.4%)	増 ↑、前月比0.1%	増 ↑)
③ 輸出量:	168百万ト (前年比1.6%)	減 ↓、前月比0.0%	増 ↑)
④ 在庫量:	115百万ト (前年比14.2%)	増 ↑、前月比1.0%	減 ↓) / (在庫率 30%) うちBRA40/ARG25百万ト
⑤ 価格:	<u>\$13.28/Bu</u> (前年\$14.52/Bu / 前月\$12.66/Bu) と前月比\$0.62 上昇。		
⑥ 概況:	世界生産量は、米国単収増等から <u>4億トを回復し前年比7.6%の大幅増</u> で史上最高見通し。輸出量は前年比若干落ちているが中国は輸入量1億トに寄せ世界貿易量の約6割を占めている。在庫量は消費が生産増に追いつかず前年比14%の大幅増見通し。		

世界の穀物・大豆等の需給

2023年11月9日
米国農務省発表： 単位 1 0 0 万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,797	3,592	513	2,799	793
	2021/22		2,750	3,543	495	2,770	773
	2022/23	10月	2,796	3,563	494	2,799	764
	2023/24	11月	2,799	3,572	496	2,805	767
小麦	2020/21		781	1,065	203	793	272
	2021/22		789	1,062	220	792	270
	2022/23	10月	783	1,051	206	793	258
	2023/24	11月	782	1,052	205	793	259
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2020/21		1,502	1,825	254	1,487	338
	2021/22		1,447	1,785	221	1,456	329
	2022/23	10月	1,495	1,821	236	1,483	338
	2023/24	11月	1,499	1,828	238	1,487	341
米	2020/21		514	702	57	519	183
	2021/22		513	696	54	521	175
	2022/23	10月	518	691	52	524	167
	2023/24	11月	518	693	53	525	167
大豆	2020/21		360	461	154	363	98
	2021/22		372	470	171	370	100
	2022/23	10月	400	501	168	383	118
	2023/24	11月	400	501	168	384	117

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	10月	298.13	1,214.47	186.92	1,200.20	196.25	312.40
	11月	299.22	1,220.79	189.87	1,205.03	199.62	314.99
アメリカ	10月	34.58	382.65	0.64	312.82	51.44	53.62
	11月	34.58	386.97	0.64	314.72	52.71	54.75
アルゼンチン	10月	1.11	55.00	0.01	14.10	41.00	1.01
	11月	1.11	55.00	0.01	14.10	41.00	1.01
ブラジル	10月	10.36	129.00	1.20	77.50	55.00	8.06
	11月	10.27	129.00	1.20	77.50	55.00	7.97
EU	10月	7.19	59.70	24.00	79.50	4.10	7.29
	11月	7.18	59.80	24.50	80.00	4.10	7.38
日本	10月	1.37	0.01	15.50	15.50	0.00	1.39
	11月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
中国	10月	205.82	277.00	23.00	304.00	0.02	201.80
	11月	206.04	277.00	23.00	304.00	0.02	202.02
ロシア	10月	0.91	14.60	0.05	10.60	4.20	0.76
	11月	0.91	16.00	0.05	10.90	5.30	0.76
ウクライナ	10月	2.41	28.00	0.02	5.50	19.50	5.43
	11月	2.41	29.50	0.02	5.50	20.00	6.43

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	10月	101.89	399.50	165.75	383.28	168.24	115.62
	11月	100.31	400.42	165.75	383.68	168.29	114.51
アメリカ	10月	7.30	111.70	0.82	66.08	47.76	5.98
	11月	7.30	112.39	0.82	66.06	47.76	6.68
アルゼンチン	10月	17.50	48.00	5.70	41.75	4.60	24.85
	11月	17.21	48.00	5.70	41.75	4.60	24.56
ブラジル	10月	31.45	163.00	0.45	59.70	97.50	37.70
	11月	33.44	163.00	0.45	59.70	97.50	39.69
中国	10月	36.80	20.50	100.00	120.00	0.10	37.20
	11月	33.79	20.50	100.00	120.50	0.10	33.69
EU	10月	1.43	3.05	13.80	16.59	0.30	1.39
	11月	1.43	3.07	13.80	16.59	0.30	1.40

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	10月	267.55	783.43	204.63	792.86	206.26	258.13
	11月	269.55	781.98	204.70	792.84	205.01	258.69
アメリカ	10月	15.83	49.31	3.67	31.54	19.05	18.22
	11月	15.83	49.31	3.95	31.43	19.05	18.60
アルゼンチン	10月	3.43	16.50	0.00	6.55	11.50	1.88
	11月	3.93	15.00	0.00	6.55	10.00	2.38
オーストラリア	10月	2.84	24.50	0.20	7.20	17.50	2.84
	11月	3.51	24.50	0.20	7.50	17.50	3.21
カナダ	10月	3.66	31.00	0.60	8.70	23.00	3.56
	11月	3.66	31.00	0.60	8.70	23.00	3.56
EU	10月	16.51	134.00	7.50	108.50	37.50	12.01
	11月	16.52	134.30	7.50	108.50	37.50	12.32
中国	10月	138.82	137.00	11.00	153.00	0.90	132.92
	11月	138.82	137.00	12.00	153.00	0.90	133.92
インド	10月	9.50	113.50	0.10	108.10	1.00	14.00
	11月	9.50	110.55	0.10	108.65	0.50	11.00
ロシア	10月	14.64	85.00	0.30	41.00	50.00	8.94
	11月	14.64	90.00	0.30	43.00	50.00	11.94
ウクライナ	10月	1.30	22.50	0.08	8.80	11.00	4.08
	11月	1.30	22.50	0.08	8.80	12.00	3.08

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…ロシア(2)

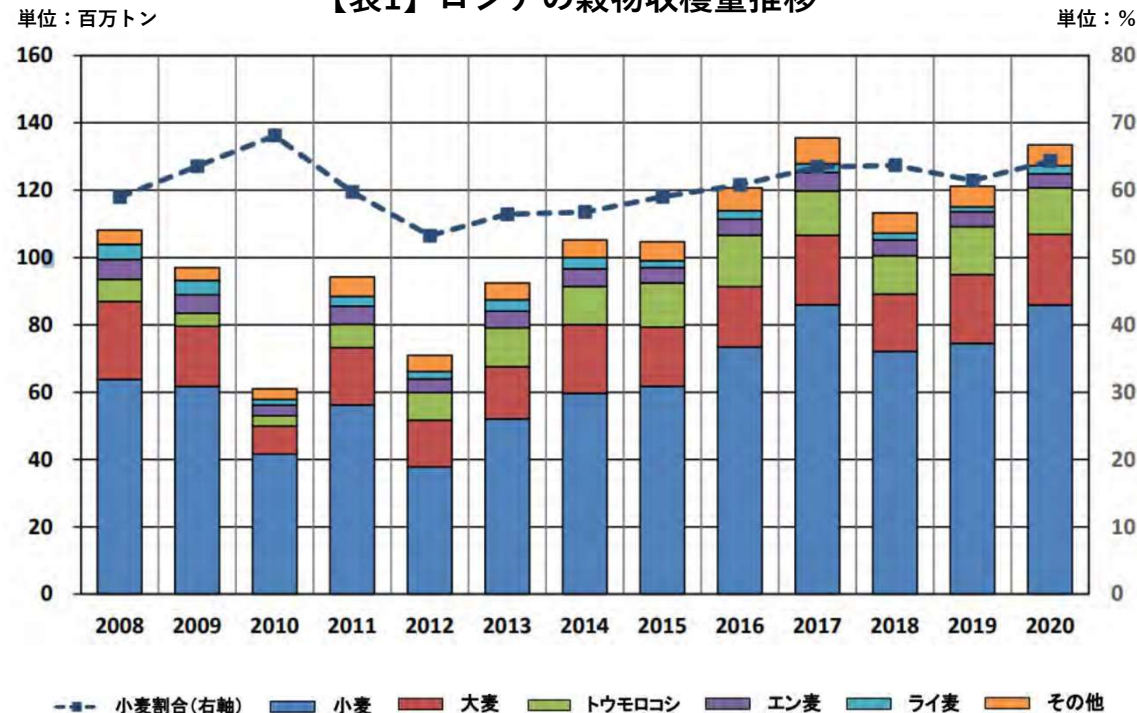
① 今月のロシア特集は、先月の流れで2000年以降の穀物生産全体の回復状況と生産の柱である小麦の地域別輸出数量推移について整理したい。[表1]は08～20年推移であるが00年穀物生産量(表外)は91年ロシア崩壊以降の社会混乱の中で**最悪の約6千万トンを下落**、ここをボトムとして08年以降の回復に繋がっている。[表1]で見ると10年12年は旱魃により凶作となったが、その後は順調に生産拡大し、**14年以降連続して1億トンを超え**、17年と22年(表外)には**136百万トンと史上最高**を記録、00年比では約2.3倍と急速に生産量を拡大している。品目別内訳では、[表1]に示す通り主食であり自然条件に適った**小麦が約6割**を占め、17年には86百万トン/22年には**92百万トン**と史上最高を記録し全体の穀物生産拡大のベースとなっている。

② 過去、1980年台には**世界最大の穀物輸入国**だったロシアは[表1]の穀物生産拡大を背景として、「表2」にある様に2000年台初頭に小麦1千万トン程度の輸出国に変身、11年に2千万トン、17年には一気に4千万トンを突破、そして**22年には48百万トンと史上最高輸出量を記録**、世界最大の小麦輸出国としての地位を不動のものにした。また輸出シェアも21%(48/222百万トン)とEU/AUSを引き離している。このロシア産小麦の最大輸出先は[表2]にある通りトルコ/エジプト等の「**中東/北アフリカ**」でほぼ07～17年までは**60%以上**を占め、次いで「サブサハラ」「アジア連合」が其々15%程度となっている。しかし、17年以降小麦生産/輸出数量が底上げされる中で中東/北アフリカのシェアは50%程度まで下落し、**輸出先の多角化**が進んでいる。

③ このロシアの小麦生産/輸出拡大の背景は、① 2014年のクリミア併合以降のルーブル安による輸出収益性向上/生産意欲拡大⇒特に生産中核組織である「**アグロホールディング**」上位10社17年520⇒21年615万ha、「**農業組織**」06年2,400⇒16年2,900ha/戸などの**規模拡大**と生産効率化。また主産地である北カフカス/沿ヴォルガ/中央黒土などに於ける作付面積拡大 ② 肥料投入増加/優良品種の利用拡大/機械装備の充実⇒**単収増加**(冬小麦00年2.0⇒19年3.6トン/ha) ③ 広範な黒土地帯(チェルノーゼム)の存在と温暖化による**耕作適地の拡大**等が挙げられる。以上の3点と併せ、22年2月のロシアのUKR侵攻によるUKR穀物生産/輸出のダメージが**ロシアを有利にしている**。侵攻前と現在のUKRの小麦/コーンの生産/輸出数量は、小麦33/19⇒21/11百万トン、コーン 42/27⇒28/20百万トンと**約6割前後まで落ち込んでいる**。特に、小麦は輸出先が競合する**中東/アフリカ地域でのロシアの数量拡大が顕著**。

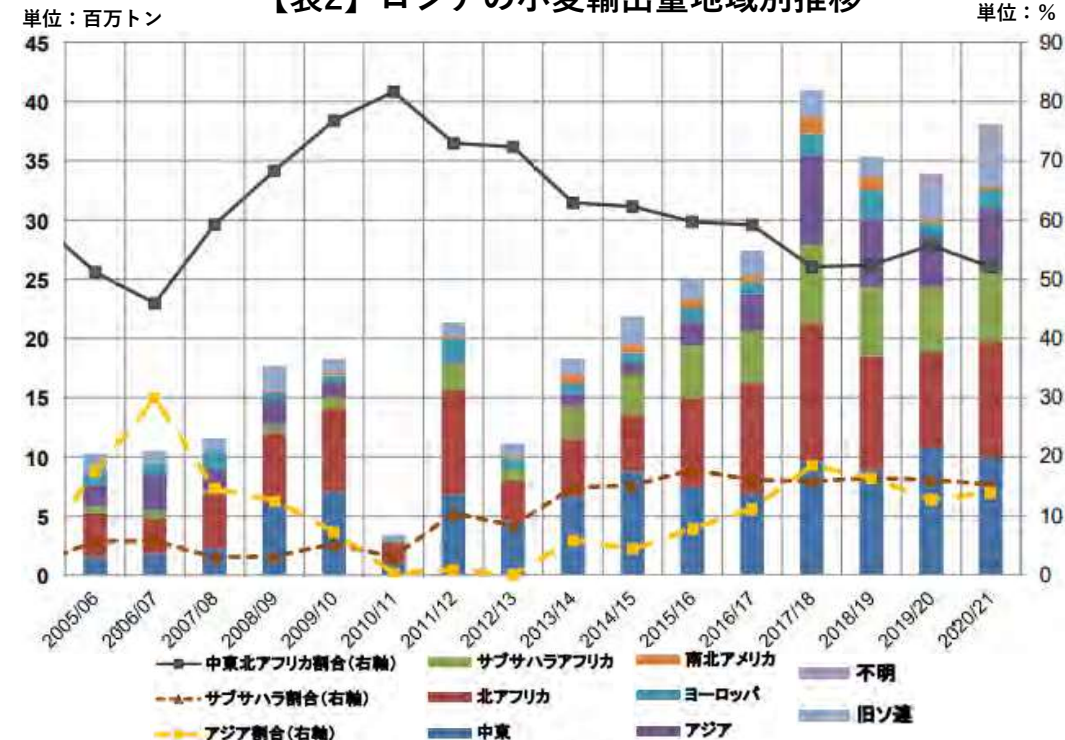
④ ロシアの穀物生産/輸出拡大の構造的要因の一つは前述した2014年2月のクリミア侵攻以降の欧米制裁を発端とした**極端な「ルーブル安」**である。経過的には、侵攻前13年末1ドル33R⇒15年1月71R⇒その後65～75R推移⇒22年145Rに急落⇒現在**100R前後**で推移。要するにこの間**ルーブルは65%下落**、13年末比**1/3のレート**となった。それと併せ、ロシア産小麦の競争力の背景は競合相手であるAUS/EU等と比較して**国内物流コストが安い**ことが挙げられる。2015年USDA調査によると、AUS 84.6豪州ドル/トンに対しロシアは55.8豪州ドル/トンと30ドル近く有利。中身は港湾荷役を除き、農場⇒サイロの輸送コスト/保管経費/内陸荷役/港湾までの輸送コスト等がAUSを下回っている。昨年度の**世界小麦輸出入数量2.2億トン**を国別/地域別に分解すると、産地事情/品種特性や港湾立地/物流コスト等を背景に**ロシア48百万トン**⇒前述のトルコ等中東/エジプト等アフリカ全域、**EU 35百万トン**⇒アルジェリア等北アフリカ/ベルギー・オランダ等EU域内、**AUS 33百万トン**⇒インドネシア等東南アジア全域、**CAN 26/米国21百万トン**⇒中国/日本/韓国等北東アジアといった構図に大別できる。(続く)

【表1】ロシアの穀物収穫量推移



出所：農林水産政策研究所（ロシア連邦統計庁ウェブサイトから作成）。

【表2】ロシアの小麦輸出量地域別推移



出所：農林水産政策研究所（ロシア連邦税関庁「通関統計」及び「通関統計データベース」から作成）。